

徳山藩に命を捧げた福間家の人々

会員 栗 崎 健

プロローグ

平成二十五年夏、大成寺住職より突然、「紹介したい人がいるからすぐ来て欲しい」との連絡あり。

大成寺は徳山藩毛利家の菩提寺である。今も寺の裏山には周南市の文化財に指定された毛利一族の墓所がある。その大成寺二十世堀江一道住職とは同級生の幼馴染であり、親友である。その昔、境内に生なつていたぐいの実（グミの実）をこっそり食べあつたり、本堂の棟上げの時の餅まきでは、子供には拾えず、住職のお母さんにいただいて帰ったこともある。なにやかや、行かないわけにはいかなのである。

馳せ参じると勝新太郎をこぢんまりとした感じの恰幅

のいい紳士がお待ちであった。

福間元辰もとしのぶこと梅田守氏。七十三歳。徳山藩家老職を歴任した福間家の子孫である。

その方が一体私に何の用であろうか。

仔細は、周南市在住の福間家に保存されている刀剣類を修理、再生するためわざわざ東京から来られた由。レンタカーにて取りあえず岡山まで運ぶとのこと。何のことはない運搬のお手伝いをする事になった。ところが、これがあるがたい福間家との御縁の始まりであった。

後日、梅田氏より豪華に装丁された一冊の福間家の家譜が届いた。五百三十六頁にわたる福間家の歴史である。

福岡氏伝

福岡氏は宗祖より因幡に住して、代々山名氏の一族であるとともに家臣であった。後光厳天皇（在位一三五二―一三七二）の時代、山名伊豆守時氏の徴臣に福岡三郎という者あり。勇力、軍功数々あり。三郎の子、福岡備前守貞平は故あつて雲州の塩冶に属したが、また元の山名の家臣に復した。嘉慶二年（一三八八）將軍足利義満公の將山名陸奥守氏清と、南方の將楠判官正勝が河州平尾にて戦つた時、氏清の軍勢五隊の内、貞平はその一隊七百余騎の將であつた。軍功あり、勇力を振るつた。貞平の子福岡備中守瀨明も大いに軍功を挙げた。瀨明も山名陸奥守氏清に属していた。しかし、明德二年（一三九一）將軍義満公が山名氏清を追討。その際、山名宮内少輔時瀨が、將軍方に属して二條大宮に於いて戦つた。つまり山名氏は二派に分かれて戦つたのである。その後、山名氏の家運が衰亡、瀨明の臣僕も皆四方に離散した。瀨明の孫福岡掃部助政貞は、備後国三次郡簸返城主となつたが文龜三年（一五〇三）死す。討死ともいう。

政貞の子政重、その子に福岡彦右衛門元明あり。毛利元就公の家臣となる。度重なる戦場に於いて元明の武功は数えきれない。その中でも、毛利軍に追われ富海で自害した大内太郎左衛門輝弘をいち早く見つけ、首を持ち帰つたこと、雲州尼子の猛將山中鹿之介の首を討つたことは特に有名である。しかし、十四度目の出陣、豊後の大友と毛利家が戦つた時、大友の幕下高橋秋種の部下、稲富羽右衛門と豊前大里の浜にて槍を合わせ戦死した。時に天正十四年（一五八六）丙戌八月二十六日、四十三歳であつた。その地に吊いの松が植えられた。



<福岡松> 元明戦死地の門司区大里ヶ浜に松と石碑があつたが、松は枯死、石碑は近くの西生寺境内にある。

元明の子、**福間淡路守元道**は毛利輝元公に仕える。輝元公二男就隆公三歳の時、傳役もりやくになる。その後、就隆公が徳山藩主に任じられた時、就隆公を補佐するよう命じられる。長男**就辰**に家領を譲り、就辰を萩に残し、徳山に赴任した。五人の子の内、四人は徳山で育つ。即ち、**二男隆治**、**三男隆之**、**四男隆常**、**五男隆廉**である。以後、この徳山の地に於いて、福間家は毛利徳山藩に命を捧げ、連綿と今日に繋がる繁栄を築いていったのである。

福間元明の活躍

福間家の祖福間三郎が、山名氏から福万氏と姓を改めた。正確には福万三郎である。その『福万』を『福間』に変えたのが元明である。福間家の武勇を語れば、福間氏伝に記してあったようにこの元明が一番であろう。

陶晴賢を敵島で滅亡させた戦では、戦鬪前の敵情視察に、敵島神社の神官の衣装を着用、誰にも疑われず島中自由に往来し、正確に詳細な報告をしている。その機知と胆力に、元就をして「最大の勲功者は福間元明である」

と言わしめている。

有名な山中鹿之介の首を討った戦は、天正六年（一五七八）松山城下を流れる高梁川たかはしの阿井あいの渡わたしにおいて、河中で討取ったのであるが、その時、鹿之介の首に提げていた大海の茶入れ及び七首あいくちを持ち帰った。茶入れの蓋は象牙でできており、裏には金箔が施されている。七首には龍の模様が彫られている。

戦前、山中鹿之介の子孫である大阪の財閥鴻池は、その遺品が存在していることに気づき、金に糸目を付けず買い取りを迫った。が、当時の長男就辰系十三代**二郎**は満州転勤の際、紛失したと言い張り、公開を秘していたという。その後、二郎の甥、長男系十五代**福間雄一**氏にNHKから取材があり、七首や茶入れは全国に放映された。現在も福間雄一氏宅に保管されている。

元明の兄彦十郎重信も元就の家臣であったが、十八歳の時、藝州黒瀬の党（陶晴賢の兵）討伐の戦で戦死した。その折、元就公、隆元公二人の連名あていじょうの宛行状あていじょうを元明（當時松若）が賜っている。

毛利元就・同隆元連署宛行状

今度黒瀬安芸國之者共珠伐之時 其方兄彦十郎討死候 感悦

更不及申候 仍三若之内伊藤分田壺町小・畠一段 迫

分田六段・屋敷一所 石原之内田四段之事 為給地遣

之候 全可知行事肝要候 仍一行如件

天文二十三年十一月二十四日

元就 花押

隆元 花押

福万松若殿

徳山藩福間家の祖淡路守元道

元明の長男元道は毛利輝元公に仕える。文禄、慶長の役の際は輝元公に代わって総大将の毛利秀元を補佐し朝鮮に出兵する。小早川隆景や黒田長政等と戦を共にした。

輝元公二男就隆が三歳の時、傳役もりやくを勤め、以後、就隆

公を補佐する。就隆公が下松に三万石を分地された元和三年（一六一七）、藩の家老職となった元道は五十八歳である。就隆公はいまだ十六歳であった。寛永八年（一六

三一）館邸が下松に竣工。寛永十一年、幕府は就隆への分地を正式に認め諸侯の列に加える。寛永十五年、就隆公初めて下松の館邸に入る。その翌年、就隆公の活躍を見届け、安心したかの如く元道は、徳山に二男から五男の四家の福間家を残り、八十歳の高齡をもって天寿を全うした。福間淡路守元道こそ徳山福間家の祖である。

元道長男就辰、江戸留守居役に

福間淡路守元道が、徳山藩行きを命じられ、ひとり萩本藩に残された元道の長男就辰。藩主の信望が厚く寛永十年（一六三三）三十八歳の時、江戸留守居役に拔擢される。以後、妻子を萩に残し、新たに江戸で妻を娶り、二十五年間、萩に帰ることなく江戸で毛利家のために尽くした。その時、就辰が書き遺した史料（日記）が山口文書館に所蔵されている『公儀所日乗』である。

東京大学大学院情報学環教授、史料編纂所教授山本博文氏は全36冊の『公儀所日乗』を読破され、学術文庫『江戸お留守居役の日記』として、就辰の働きぶりと共に、

当時の歴史と並行して書き下ろされている。講談社より発行。就辰の詳細はこの本にお任せすることにしよう。

元道二男隆治、父と共に下松へ

隆治は慶長二年（一五九七）兄就辰と同じく広島で生まれた。就隆公に仕え百石を給される。

ある時、冤罪で入牢させられる。無実が晴らされた時は、既に病が重く、父元道より早く二十八歳の若さで逝ってしまった。結局、元道の家老職を継いだのは、隆治の弟、隆之（三男）であった。

二男系初代隆治の九代目に福間舜欽が出る。興讓館初代教授である。号を青海、通称左衛門という。少壮にして肥後の辛島塩井に学んだ。塩井は熊本時習館の教授で程朱学を奉じ、碑史、野史にも博く通じていた。藩学が徂徠学から朱子学へと移行していった時期である。

舜欽は嘉永四年（一八五二）六月、小川乾山の後を受けて鳴鳳館の教授となり、館名の変更後もそのままとどまって興讓館の初代教授となった。当職栗屋大炊、栗屋

采雄、小川乾山、飯田竹塙らとは不和であったが当職福間刑馬（三男系九代目寿昭）とは合い許す仲であり、本城清、江村彦之進らともよかった。正義派である。その教授となるや、文学寮を増築し、あるいは積菜を盛んにして老年人、孝子を敬い表し、あるいは留学生を諸藩に派遣するなど、しきりに学政を拡張して士気を鼓舞した。また、施設の見るべきものが多かったが、財政がこれに伴わなく反対派の乗ずるところとなり、安政元年（一八五四）七月、厳しい譴責を受け、同年九月十二日幽閉中に没した。自刃したとも言われている。

二男系隆治の長男隆良から分家した初代良治系六代目嘉明は中島流砲術指南役で砲術家として有名であった。同時期、西洋砲術で名をなした兼崎橙堂は一時期お家断絶となり、大阪・堺で浪人していた。その橙堂を舜欽が呼び戻し、許され、兼崎家は再興されたのである。

舜欽の養嗣子となった十代目敏輔（駒太）も義父舜欽の志を継ぎ正義派として活躍した。慶応元年（一八六五）九月九日、徳山藩九代藩主毛利元蕃公の、藩論を正義派



福間敏輔と妻ソノ

ふたりには子供がなかったが、仲睦まじい様子がうかがえる。この写真の原版はガラス板に感光、定着してネガをえたもので、桐箱に納められていた。

とする告文に応じ、俗論を主張する者は死せんとする血盟書に、敏輔は大野直亮、三吉族に次ぎ三番目に勢い血判している。また六番目には家老福間刑馬の三男勝美の名前も見える。同年には諸隊が編成され、練兵塾を献功堂と改称、敏輔も勝美も教練懸りを仰せ付けられている。敏輔は維新後、教育者の道に進み、藩校が徳山小学、桜馬場小学、岐陽小学と改称されていく中、学校の発展に尽くした。明治十一年（一八七八）に設立された岐陽小学の一ノ井出支校（後、分校）では校長を務めていた。明治三十一年六十一歳にて亡くなるが、その後、大正時代まで敏輔の命日には校長並びに五、六年生の代表が福田寺に墓参りすることが慣例になっていたという。

左から2番目キワ 右から3番目庸子様



福間キワ（明治17年～昭和32年73歳卒）

夫孝作と平壤で事業を興す。順調であったが孝作は平壤で死亡。太平洋戦争終戦で福間家は財産すべてを失う。長男襄は一族10名を引き連れ38度線を出発、命からがら帰国した。その後、富士化学（株）を興し現在の隆盛をみる。

敏輔の養女となったのがキワである。キワがいなかったら、ここで断絶して、福間二男系の今はなかった。キワは毛利家に勤め、徳山毛利家十一代当主元秀の室庸子様に特に可愛がられた。平壤に渡ったキワは戦後、無一文で帰国。その時も毛利家にお世話になっている。

元道三男隆之、家老職を継承

二男隆治が家老職を継ぐはずであつたらうが、不慮の事件に巻き込まれ若くして亡くなったため、三男系初代の隆之が五百石の家老職を継いだ。その子隆信は六百石に加増され、廃藩置県時の十代目蕃雄（式部）まで六百石を維持、歴代の藩主を支えていった。

三男系五代目**堯義**は、五代藩主広豊公の時代罷免され一時断絶した。しかし後、徳山藩に帰参し、福岡家一族の家譜を実に四十七年間調査し作成した。これが元になつて今日の新しい家譜が完成したのである。家督は嫡子**豊宣**が継ぎ、三百石に減らされた給禄も六百石に戻し、立派に家老職を勤めた。

三男系九代目**寿昭**（刑馬）は、幕末の徳山内訌の時、正義派の主導役となり、俗論派の家老富山等の壁となつた。富山を襲つた正義派等の取り調べでは、福岡の指図であろうと厳しく責め立てられている。寿昭は、七人の殉難者をだし、幽閉、切腹を迫られたが藩主元蕃公はこれを許さなかつた。藩論、再び正義派にかわり、要職に

復帰。練兵塾総裁等を勤め、鳥羽伏見の戦いでは世子元功公の補佐に努め、ついで大参事に任命されたが高齢の為辞職、明治十八年七十九歳にて卒した。

元道四男隆常は弓の達人であつたが

福岡家より家譜をいただいたことは冒頭に述べた。私は、毛利徳山藩の家臣たちの譜録に興味を持ち、各家の家系を調べている。譜録は藩に提出するものであつて、正直に正確に記すよう定められていた。姓氏之部、世統之部、禄格之部、母妻子女之部、拝領物之部、職務之部がある。しかし、幽閉、蟄居等お咎めがあつても、詳細には触れていない。つまり、家系の影の部分はなかなか見えてこないのである。

今回、福岡家を紹介させていただいたが、この福岡家譜には福岡家の影の部分も、隠すことなく赤裸々に記されている。実に深く感銘した次第である。都合のいいことだけを記すのではなく、ありのままに記述する。家譜とはそういうものであろう。

福間家の影の一部分を紹介したいと思う。

四男系初代**隆常**は初代藩主就隆公に仕え百五十石で召出された。城州山科片園流射術の達人であった。他家へ仕官したく暇を願い出るが許されず、逆に江戸へのお供を命じられる。その後も、何の沙汰も無いので、名声を願い、ついに出奔した。兄の隆之たかゆきは藩に「探し出して切腹を申し渡したい」と願い出るが、それには及ばないということであった。その隆常は各地を浮浪した後、防州大島郡の島尻にたどりつき、妻子を連れだし漁獵ぎょりょうをして過ごしていたが、困窮の果て妻は病死してしまった。五人の子供達はそれぞれ別の親類に預けられた。夢や、あるいは野望を抱いていたのであろうが、悲しい結末であった。

隆常の三男は、出家し龍文寺九巖寺の和尚の弟子となり幾度と寺を移り変わり住む。大磯和尚だいじょうしという。大成寺に住したこともあるが、ある時、甥の増野幾助まけすけ（隆常の孫）が従弟の莊原市右衛門（隆常の孫）を辻の借家で殺害する。その後、帰宅していた幾助に大磯和尚は理由を聞いて

た上、切腹を申し聞かせる。覚悟した幾助は直ちに切腹、大磯和尚は幾助の介錯をしたという。

当時は、徳山藩の改易が許された頃で、家の無い浪人も多く、不安定な世情が遠因のようである。

元道五男隆廉の運命は

五男系初代隆廉は就隆公の御小姓として召出され、最初は禄高わずか四人扶持であったが、徳山藩二代藩主元賢公もとけんの兄岩松様の傳役等もりやくを経て、禄高三百石まで出世した。元禄四年（一六九一）故あって出頭格は取り上げられ、禄高半減、隠居を命じられる。その故とは、元賢公が亡くなられ、三代藩主に元次公が就かれたことにある。妾腹の元次に反対し、長府毛利綱元の第二子を迎えようとする動きがあった。その跡目争いで負けた綱元派は一斉に肅清され、家老神村将監、桂民部両家は断絶追放された。藩刷新の対象人物として、隆廉も含まれ、降格となったのである。一方、三男系初代隆之の跡を継いだ隆信は、綱元派に属さず元賢公に従っていた。結局、病

に倒れていた元賢公が最終決定を下し、元次公が継嗣することとなった。その後は、元次公に忠節を尽くし、また、数々の功績を遺し、福間家の禄高五百石を六百石に上げ、家老職を無事継続した。隆信隠居後、元次公は隆信を気遣い、度々、立ち寄られている。

隆廉、隆信は叔父、甥の関係であるが、まさに明暗を分けた藩主就任劇であった。

隆廉は『福間隆廉自記』（公用日記）を天和二年（一六八二）から元禄四年（一六九一）までの十年間に日記として十九冊遺している。（山口県文書館蔵）

享保八年（一七二三）九十二歳の高齢をもって卒した。五男系七代目良衛の長女秀は遠石八幡宮黒神直人に嫁ぐ。その孫が徳山市長を務めた黒神直久宮司である。

福間家に伝わる幻の刀

幻の刀は二男系十一代目孝作の四男竹下駿が所持していた。昭和二十年、福間家に伝わる刀を軍刀に改装し、常に提げて歩いていた。ある時、見知らぬ人に声をかけ

られた。「あなたはどちらの徳川様ですか。」そうではないことを告げると「普段は提げられぬ方がいい。その鏢は梧桐の鏢、徳川様のお抱えの鏢師の造りです。鏢には金が含まれていて一般の人は滅多に見ることが出来ないのですよ。」と、いろいろと教えてもらい、その時、初めて刀の詳細を知ることとなった。その後、調べたところ、

徳川家と特に関わりがある者は、江戸留守居役をした就辰しかいないことがわかった。江戸に三十年暮らし、萩に残してきた家族は父元道が面倒を見ているという事実から、恐らく就辰が拝領した刀を父元道に、感謝の意味を込めて贈ったのであろうと駿は確信した。

しかし、その由緒ある国宝級の刀は駿が留守中、何も知らない義父が訳あって処分してしまったのである。戦後間もない頃で致し方なかったことであった。残念がった駿はせめてもと絵にして残した。

甦った福間家伝来の刀

昨年九月、五男系十二代目当主福間元辰こと梅田守氏

と、二男系十五代目当主**福岡壕**^{ゆたか}氏が周南市に来られた。両氏とも東京在住である。

一昨年、初めて梅田氏にお会いした時、運搬のお手伝いをしたあの刀は、実は竹下駿^{まきもと}が涙ながら、絵に残した幻の刀、その福岡家に伝わる刀として甦^{よみがえ}ったのである。

絵に忠実に甦^{よみがえ}らせたのは刀匠宮入法廣氏^{みやいりのりひろ}である。宮入氏は長野県無形文化財の名匠である。刀鍛冶は全国にたくさんいるが、その頂点に居るのは十八人衆。人間国宝を含めてこの別格な刀匠達を「無鑑査」と呼ぶ。宮入刀匠はそのひとりである。



説明をする宮入刀匠



出来上がった太刀

宮入氏も福岡氏等と一緒に周南市に来られ、その刀のお披露目に私も同席できる幸運に寓^{あや}した。そして、他に同席した人はいないと、徳山藩福岡家のことである、徳山毛利家十四代当主毛利就慶氏^{なりよし}、十二代元靖二男就圀氏^{なりくに}、大成寺堀江一道住職がかけつけた。ただ、ただ驚嘆の一日であった。

エピソード

刀のお披露目の翌日、宮入氏の希望で、宮入、福岡、梅田各氏を大津島の回天基地に案内した。皆さん忙しい中、わずか一時間ではあったが、喜んでいただき何よりであった。

福岡家の歴史は今日も、たった今の瞬間も刻まれている。徳山藩毛利家も徳山毛利家として、永遠に語り継がれていくだろう。その歴史の中で、私も、私の家族も、ささやかながら今を生きている。

先人たちが築いてくれた今を生きている。

徳山藩に命を懸けて、時代、時代を生き抜いてこられた福間家の人々、そして、四十年の歳月をかけて、福間家譜を完成、発行された福間ゆたか壊氏、編集の小原しゅう修氏、竹下まきる駿氏、そして福間家譜にありのまま、梅田家の歴史を編纂された福間もとのぶ元辰こと梅田守氏に敬意を表します。家譜は過去を知ることにより、未来のそして夢への道標になるのではないのでしょうか。最後に、福間家譜の引用を許可していただいたことに厚く御礼を申し上げます。



家譜は650年遡るところから始まる膨大な史料である。徳山藩の歴史にもふれながら、家譜は記述されている。また、家譜とは別に萩藩及び、徳山藩家中屋敷絵図、徳山藩絵図、同家中絵図が福間家系譜とともに納められている。



回天基地跡にて 周南市大津島

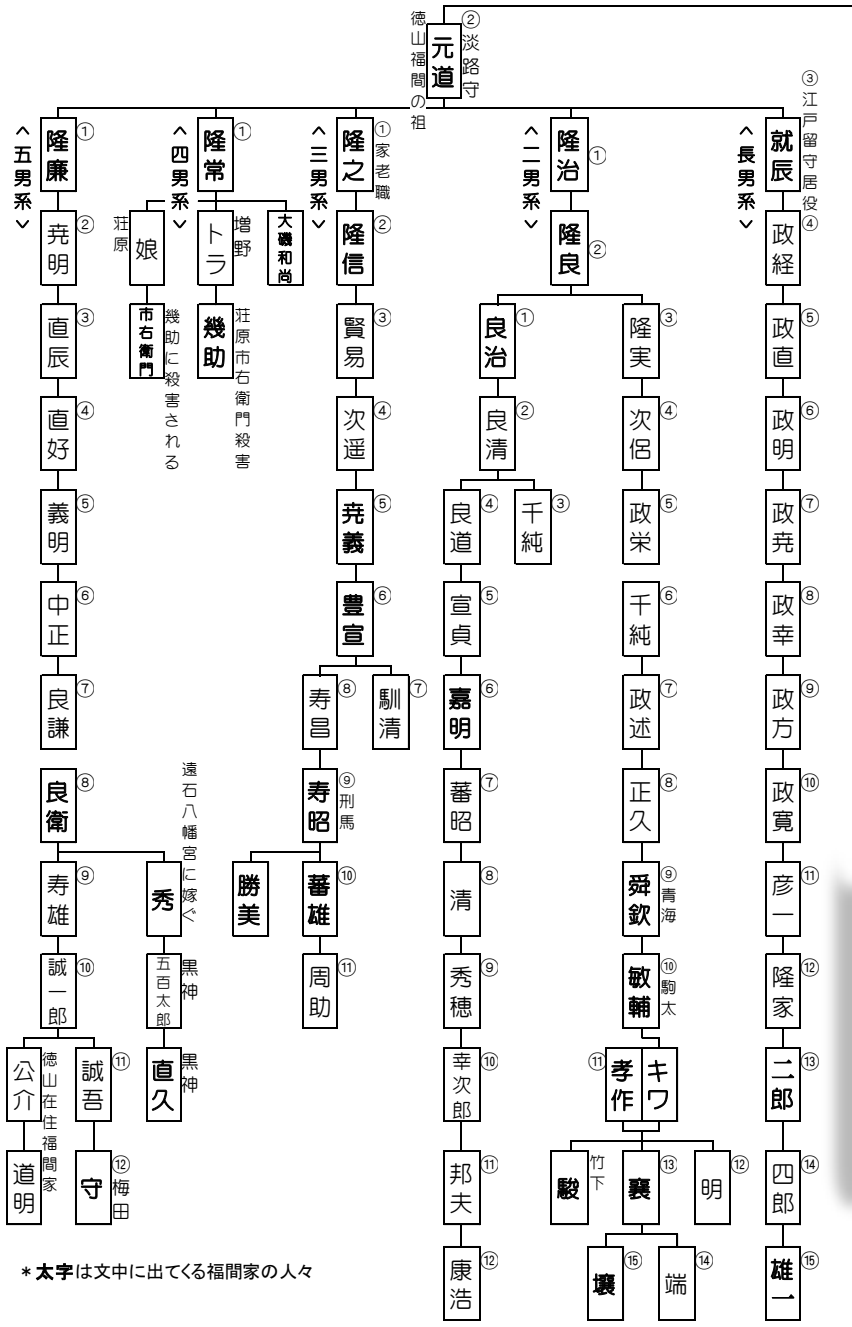
右より 梅田守氏、福間壊氏、宮入法廣氏
2014年9月17日 著者写す

〔参考文献〕

- 『福間家』家譜 改訂版 福間壊発行（二〇一三年）
- 『江戸お留守居役の日記』 山本博文著（二〇〇三年）
- 『日本職人名工会』職人の住む町 刀鍛冶
- 『橙堂遺稿補遺』兼崎茂樹著
- 福間家文書（山口県文書館）
- 徳山毛利家譜録（山口県文書館）
- 徳山市史
- 徳山市史史料
- 徳山小学校史鳴鳳

福間家の祖 備前守 三郎
 備中守 貞平
 備中守 源明
 雅楽頭 秀貞
 政貞
 政重
 元明 ^①武勇伝多数

福間家系図



* 太字は文中に出てくる福間家の人々